
SKY WORLD

星垣ケイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S K Y W O R L D

【Nコード】

N 1 1 5 1 D

【作者名】

星垣ケイ

【あらすじ】

これは、不思議な航空機ウィルと、少女エマの空の世界の物語。

プロローグ

何処までも続く果てしない空。

そんな空の中を駆ける様に飛ぶ、何かがあった。

「わぁ：今日も飛んでる、飛んでる！」

何かが飛び回る空を見上げながら、目を輝かせている少女が居た。

「この丘からだとよく見えるな」

花が咲き乱れる丘で空を眺めている少女は、見た目からして13、4歳程度だろうか。

高い位置で2つにまとめた薄茶の長い髪と青いワンピースを風に靡かせ、空を連想させる透き通ったブルーの瞳で先程から空を眺めてばかりいる。

「私も飛びたいけど：今日は母さんに買い物頼まれてるし：そろそろ行かなきゃ」

上から目線を外し、青い瞳の少女は丘を降りて街へ向かっていった。

―空を駆ける存在の名前は『ウィル』。

大昔、大地に異変が起きた時に出来た、空の中に浮かぶ世界『アルディエ』で必要とされる航空機の一つで、不思議な事に、操縦者の心に共感してその身を動かす。

心が強い人ほどウィルの操縦に優れ、自由に空を駆けることが出来る。

ウィルは空の下の世界『地上』との干渉などにも使われ、いつしかこの世界で生きていくのに欠かせないものとなり、最近ではレースも行われている。

これは、不思議な航空機ウィルと、少女エマの、空を巡るひとつの

物語。

プロローグ（後書き）

やっと書き終わりましたー！！

あ、どうも！ 桜伽らいむです。

SKY WORLD略してスカワは、前から考えてた話達を混ぜ合わせて出来た話です。作者としては結構自信作です。よければこれからも応援宜しくです！

…テスト前に何やってんだろ……。

第1章 出発

丘を降りてまっすぐ北に進んだ先にある、城下の町・セルレア。町の南部にある市場で買い物を済ませたエマは、最北の住宅街へ向かった。

住宅街は栄えていた市場とは違い、誰も居ないかの様に静かだった。エマはその静寂の中をコツコツと靴音を立てながら歩いていたが、やがて一軒の小さな煉瓦で出来た家の前で立ち止まった。

「ただいまッ」

木のドアを開けて中に入ると、ロッキングチェアに座りながらだらけて居る女性がエマを見た。

「あらお帰りー。買って来てくれた？」

その女性は、エマとは違う紫色の綺麗な長い髪を持っていた。

「：母さん、暇だったんなら自分で行ってよ：」

家の中でダラダラしている母親を見てエマは溜め息を吐いた。

自分を女手一つで育ててくれた母・リナヤには感謝しているが、少しばかり子供の扱いが酷くないだろうか…。

そう思いながらリヤナに買い物カゴを手渡し、自室に行こうと階段を昇ろうと足を掛けた時。

リヤナが

「あ、」と何かに気付いた様な声を出した。

「何？」

エマは階段を昇るのを止めて、リヤナに向き直った。

「今日は飛びに行かないの？」

リヤナの問いにエマが頬を膨らませる。

「：母さんが『門限は4時ね☆』とか言ったんでしょ」

エマが買い物を頼まれたのは3時過ぎ。今は既に5時になろうとしている。

「そうだったかしら？…まあでも、今日は寄り道したとはいえお使い頼まれてくれたし」

リヤナはロッキングチェアから下りて帽子掛けからキャスケットを取ると、

「良いわよ、飛んで来ても」

にっこりと笑いながらエマに向かって投げた。

「―本当！？（丘に行ったのバレてたんだ…）」

エマはそう言ってから、ドアを開け

「いってきまーすッ！！」

家を飛び出して行った。

「…いってらっしゃい、エマ」

リヤナはドアが閉まってから、独り言の様に言った。それから、

「…ジル…」

まるで話しかけるかの様に、呟いた。

第1章 出発（後書き）

最近寒いですね。

そんな訳でコタツで書いてます。
いやゝ寒い。

第2章 銀の翼を広げて（前書き）

やっと2話書けました！

久々のスカワの世界、ご覧下さい！

第2章 銀の翼を広げて

早く、早く行かなきゃ。

それだけを頭の中で何度も繰り返しながら、エマは町中を走り続けた。

たまに、赤く染まった空を見ながら。

エマが立ち止まってハアハアと息を切らして膝をついた頃には、辺りは暗くなり始めていた。

「ああもう：母さんの馬鹿あ：」

涙目になりながらもエマは、大きな倉庫の方へ歩いて行く。

「ーよし！」

ガチャ、と音を立て、錆び付いたシャッターの鍵を開ける。

「本当は青い空の中を飛びたかったなあー：」

ブツブツと文句を言いながらも、その顔はワクワクして堪らない、と告げていた。

「遅くなってゴメン、：さ、飛ぼう」

ゆっくりとシャッターを上げると共に見えてきたのは、日の光を浴びて光る、

「……ウイル」

銀色の、飛空機だった。

機体を外に出し、乗り込み、ゴーグルとシートベルトをしつかりと装着する。

安全確認を行なった後、深呼吸をして。

「…行くよ」

一瞬目を閉じ、また開き。

空を見据えて、そして…

高く、飛び上がった。

それは、浮上る様に、風に運ばれた様にして、飛ぶ。

まるで魔法みたいに、鉄の塊が空を飛び、回り、駆ける。

実際、魔法なのかも知れない。

人の意志に応え、機体が浮くだなんて、化学とか何とかでは解明出来ない事だ。

そう、魔法みたいに、鳥の様に。

「―気持ち良い…なあ…」

ただ、飛びたいという心を、強い意志を乗せて。

何処までも続く広い空を、世界を、少女は飛んでいた。

一方、空の下では。

「ねえ、あの飛空機って…」

少女の様な、高めの声が言う。

「…ああ、もしかしたら、あの娘は…」

青年らしい声の男が、銀の鳥が飛ぶ空を見て。

「ジルさんの、…」

青年の声は、ウィルが巻起こす風に消えていった。

手を大きく振った。

と、近くに居た”管理人”の字が入った腕章を腕に着けた男が、エマに小さく手を振った。

「エマちゃん！今日はもう終わりだよ」

男の声に、エマが

「え」と声を出す。

「もう6時」

第2章 銀の翼を広げて（後書き）

只今、死ぬ気で次話を執筆中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1151d/>

SKY WORLD

2010年10月9日05時58分発行